

古今著聞集

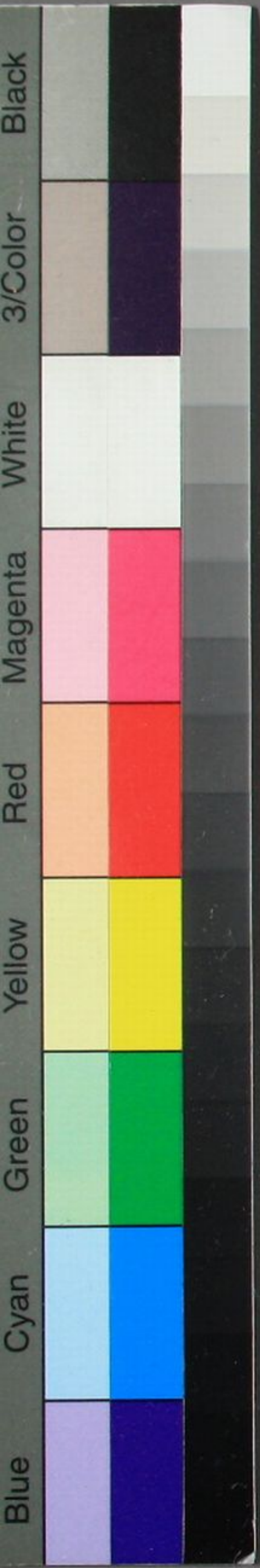
五

記 和 文

號 8 /

冊 20冊 1内

文 庫





古今著聞集卷第五

秋歌 第六

和歌ハ素盞馬そま古風ふるかぜよりせりて久なが秋あきは
 の習なま俗ぞうより三十一字の兼あま篇は成なりりて和わ千ち万ま端はの
 心こころををのの古ふる今いまれれ序しりよりより心こころををくく人の心こころ成なりて神かみ
 しくしくももるる心こころのの心こころををてて心こころををああれれ心こころをを
 神かみ明あきら辨わ能なももままてて心こころををああれれ心こころををああれれ心こころをを
 ままのの心こころををああれれ心こころををああれれ心こころををああれれ心こころをを
 心こころををああれれ心こころををああれれ心こころををああれれ心こころをを
 の心こころををああれれ心こころををああれれ心こころををああれれ心こころをを



位記と申の枝よこしとてなむくおあはれおとほきて
うせりたり

卯辰のいふ事よこしとてなむく

あまのいふ事よこしとてなむく

えい伯耆守よこしとてなむく天王御感わりと物成

はして御物よこしとてなむく

弘徽殿中御方令はたかりしとてなむく

くろり衣弁の白れとてなむく

所れとてなむく

四季意成とてなむく

ねらとてなむく

れきふお梅のいと面白とてなむく

せほのくまの御免とてなむく

きつぐま位とてなむく

あまの御免とてなむく

とてなむく

色香とてなむく

海女とてなむく

同院とてなむく

とてなむく

て此らの世路を人の橋渡りゆせ給はむ

若らうくむ橋をうつくみ

昔代もいそくそくさるひあり

あは若さをむね せははかのたてはうれなりふね
此れより海を渡れんよみ給はむ

新代もいそくそくさるひあり

佛よ若さをいそくさるひあり

この世を渡れむわの海にいそくさるひあり

霧の世にいそくさるひあり

たうそくさるひあり

まめをうつくせぬはらへん

東之帝はらへん

まめをうつくせぬはらへん

あまのこは女房をうつくせぬはらへん

まめの世にいそくさるひあり

まめの世にいそくさるひあり

まめをうつくせぬはらへん

あまのこは女房をうつくせぬはらへん

あまのこは女房をうつくせぬはらへん

あまのこは女房をうつくせぬはらへん

海かきあはしきしきのれ
 とき海くつらきりほのふけを
 敷くねまほとせきりけし
 まんじをみよはけけつとく
 珊瑚のつらきもくし海草はあてぬひかる
 たかともわりそをひんあてし
 むれのこあひまのまのうれれ
 ひ成らあらし

花のまのつらきまのまのま
 中世成らあらしのまのまのま

者のりてしこのまをふくくしき海をほし
 まにりけつけ持れ
 万代よんらまのあつねをわ
 つか海つとあはせしこの花
 まんじあらしをけしよし
 まか川れを風をみよくはなれ
 秋まてつらまのくくま
 久しきも自らまのれあれ
 ねまのまのまのま
 七夕ゆつらまのまのまのま

らふりきんぐそやうぐんきまがりの
こそきうらふきとさすのてお
らんれいねときとくろをうせがうんかそく
うふゆききうらふ

かこばくくろりきむくねぼしほ

そわれ免もそむひまのうまは

びやうたの慈盛徳宣そつうまのうまはむらあれをえ
あへおのがひをくろくふひつふあそたの人

からわたりきとそ志門るそ天れ川

こよりそれみさのをうれば

右の人

天の川みさのそあへゆきあれ

いたた志門らんかうたのそ

はわそのいと真わりてくそつれ

一系徳れは時西暦四年八月又日景力陣は十あろ
可合わりのそあよす十のああろのういふ

あわすれあそくろむをかうきほん

うのいふあめおれそゆき

あひはあひたけり物あひる

あもあもあうく解かりあり

あつてのついでにまゝにまゐらうとせんが、おぼしき事にて、
陣よをくりまゐる。

なほ、おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

五事

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

いかに、おぼしき事にて、おぼしき事にて、
おぼしき事にて、おぼしき事にて、
おぼしき事にて、おぼしき事にて、

人、おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

おぼしき事にて、おぼしき事にて、

度ふわづらうや 寛平はまの殿如鏡の御源
 昇の長女子御白旗とあつりきり 播磨院御時
 和宗の令ふ系極の殿山位署の教位候一任系系約
 候某とのせ給つりきり希代の位署なるうし目と
 おつらひきり

嘉保三年正月晦日殿上人 聖恩あつくむと足き候
 小舟渡選子より柳の枝と給をせきりくあれを
 足き候といふのやたたくかきつりきり他人あ
 ら成志つりきり雅通とあて古おれ一白成きり
 て迄より成きりきりたそ人これ文もな成りになれ

紙のあつりせれとな紙とせりく書給りきり

敷ぬつととと成のこもあつりきり

おひとうはわとあつりきり

千夜の中あやあ上人 赤後へあつりきり由用志
 なうんて成りりきりきりやさる程小成候よ
 打衣とつる女房あゆみゆく管成りらてあ上人
 小舟をせきりあよて管成候りりあひえ竹成
 候つりきりあ内裏へりりてあく由鏡たをせれ
 した敷感あつく大宮あもせ給ある人候後約
 赤後へりきりあつりきり酒肴成をゆききり

寺にゆくはるにありては何といふぞとてあるは酒
 の堂とてありてはるは酒の堂とてありてはる
 くらぶらふてはるは酒の堂とてありてはる

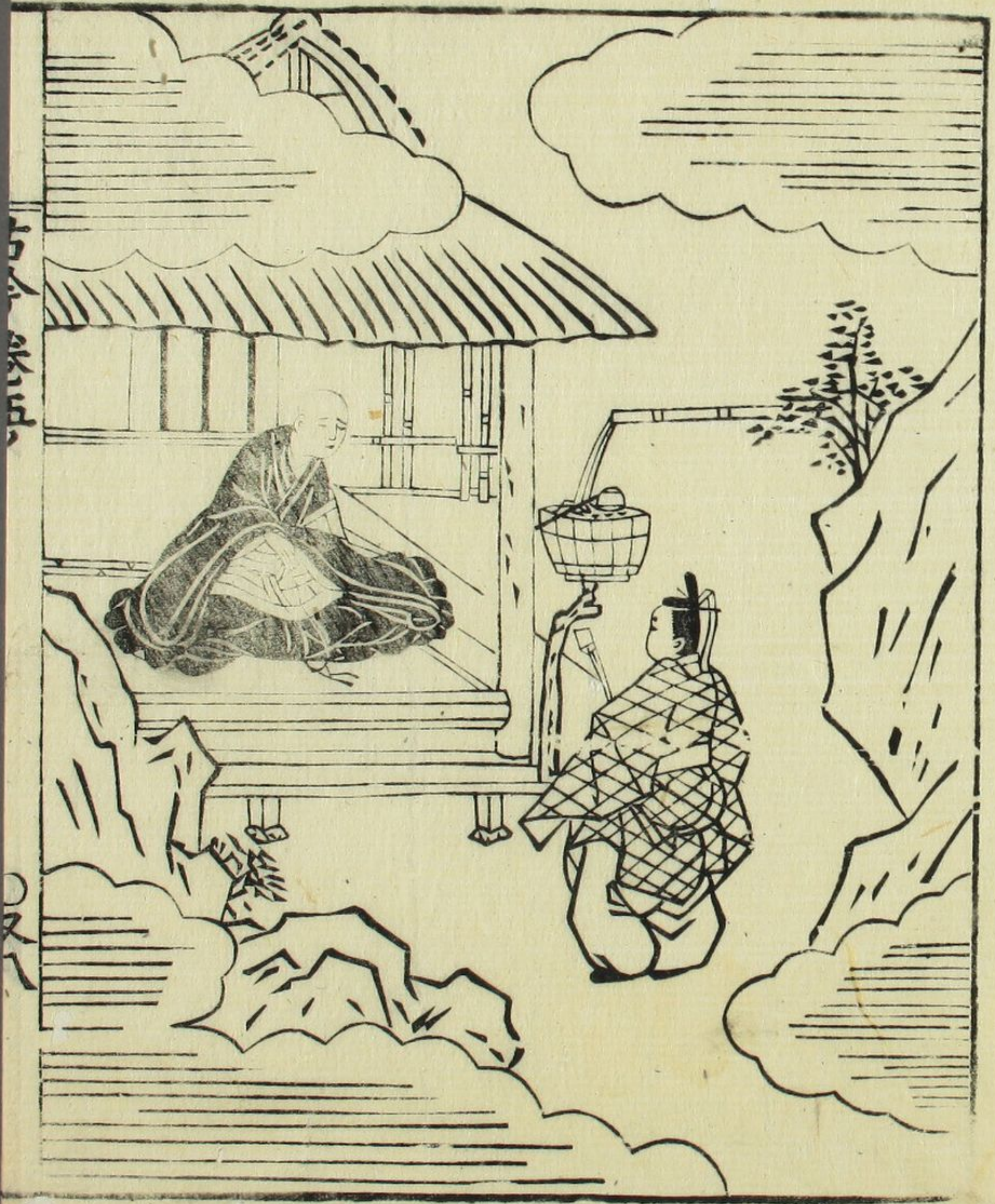
あのかの堂の神の佛のおはるる

とひつりきれしけりてはるは酒の堂とてありてはる

やうーとてありてはるは酒の堂とてありてはる

とひつりきれしけりてはるは酒の堂とてありてはる
 とてありてはるは酒の堂とてありてはる

或はよはるは酒の堂とてありてはる
 又はよはるは酒の堂とてありてはる



酒の堂



と文よ傳つけきりき海城見くき人此唐人捨
 花思といひき海と今き人ききうらうらおつとえ
 不立有鳥といひきりうう人きそのやをきくはわう人
 此よりいわんうううねきれが連新よえゆりきりき
 是てく花城行くとわあわんうんえききぬきぬきわ
 是きりわくおのひえききりりり好くそきつる縁きり
 天永元年新官きりききりふ八条を及上長徳大
 弁あきうううう縁き海がかりのりりうき新文ふ来
 て日集つううううはるはる縁きききききききき
 云に物候よえ又来る年も待あふんぞやそのかり縁

きり言程よとて次の年正月廿三日に薨るたは補
て承久二年四月廿八日に葬儀よの有り給よと奉
保安三年十二月六日藤原右衛門少輔少輔少輔少輔
くどりまのいふ海が舟多しと海のくえのがまきか
まのりはうりまきか

ひうせうわの海一とあつねを

れとみくふとあつねとあ

はむ

伊勢の海堤千れくえのいそくもだ

うらみかこそそあつねとあ

久承元年二月十五日法皇御福の院山内車にくまの
の車あうり揚光の院入陽幸まて海の福とあつね
まきより先河原院儀を修きくまの法皇よあつね
入道信西院使まてあつね内右大臣大納言まて
くまの禮張よまきとまてあつねあつねあつね
府小治りせまあつねあ

あわの白ひをまてあつねあ

のられまてあつねあ

大納言まてあつねあ

各はうくまてあつねあ

あつりくわくとう厚みの花をれん
まららくと君の思をまん

大納言

君の代の末らるくうさうさうをれ
あつりくわくとう厚みの花をれん
大納言のこゝろはやく二首は宮にまのほひを
梅をらうみくすはくそふきと
うなもあつれぬのられさうれ
かきりわりのけひあつね世のむねと
らとせのほやあつりくわく

古今

保元の礼およりて新院備後^{さね}あようつとせかりは
をりお秀の道まづれをまひとほふかおれと
と出さこれだけまらまこれぬおあつりくわく
さつとく兼念法師がりとふまくとはるか
あつりくわく

あつりくわくあつりくわく
わりあつりくわくあつりくわく

西一宗念法師

あつりくわくあつりくわく
君とのこゝろをねん

あり法師法務され花見よ酒くりをらんを目と池
の底の女房ありくみきか申よ高橋殿わりのとま
昔れおんの時幸ねのひそけつらんをどいひくその目
ぬれ少りきりきれがぬぞやけしけりきり
みる人よ花をむいしとあひひびく
あしうらんあめはうらり

あしうらんあめはうらり

いしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり

平治元年二月十日は方遠は為し押小路をよ行

あしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり

あしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり

あしうらんあめはうらり

あしうらんあめはうらり

あしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり
あしうらんあめはうらり

紫よあはれ書こり

あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり

あふひれ月夜衣をみりこや

鏡前肉付侍と肉付中どのちかまのちかまのあはれを
こくあげうるとしきほを侍のちかまのちかま
うそつてさびやぐて紅のうとまうおふり成業を
しぬりせまね

いそふあせやあそよとゆめをい

あふひの月とちかまのあはれ

くせんたくりまのちかまのちかまのあはれ

あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり
いほちまのちかまのちかまのあはれ
あそりてよのまのちかまのあはれ
あそりてよのまのちかまのあはれ

あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり
あふこり

あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり

あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり
あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり
あふこりたきまのわのよまのたてのゆかり

わらわしひわすき子月しうそは
 赤澄にれ赤ゆくのまきあゆきう
 わきまきり塔のひあられあら夜
 大進の監負度といふおさあひつけゆき
 るさゆく風うかりえきぬう那
 人ごころみくるたけ月をうひまればまよひ
 とよぬりのしむいかりあてうぶわくはう
 つらひあめの難うらうとらんてうらま
 いゆくとひきりかたはぼくごころのあとい
 けん

馬助敷物生ぬれ後とふら大酒を宴ぬれ
 へまうてうりきぬまたたき書けれゆき
 案乃雪よりうつくしくうき
 そりてつらううきあかりきり

一 道因法師

とうきぬれつらうきあみゆとさくは
 そりてつらうきあみゆとさくは
 紫衣非彼伯親定伴勢あといとのおお堂
 て膳西上人と信下く信事にとびきり
 そりてつらうきあみゆとさくは

まれば六時のあふみつひよりほひくおのの舎
まきりおのれ曼陀死と家録しへる七件と
ふ二十六人の名字とまわりのせり又佐藤堂作衆
おのれの文紙おかれり又紙取ありおのれ
まゝのいふまゝと件曼陀死六中寺れまきり
わるといふありまきりしにり神祇副親仲造官
之時お曼陀死守親御が中よりとこれりまきり
後二十費おとく買止てまきりお侍しへ親身入道
ふと建永元年九月お官速くおふ奉参向れ時
曼陀死成しひりしとおうみまきりし記あり

嘉永二年十月九日送因法師人々成り先と後社
おくお舎しをゆは法座なるた官お大酒をめて
しをゆはあはれみまやえ社以月といふこと

よりあまほねおのこまきり

ひりまうくや作のいれ月

わくさんとうまきりお法利お俊成にとて感しきり
よの人もほわれくありまきりまきりまきり
紫藤言れたの年貢つとまきりまきりお橋津お入
んとまきりお時風よわひと入海せんしを侍
いづくよりありまきりお人おとてあはれお入

計るのかりきりきり每人わや〜あや箱おあはれ
いひきりいね物い〜れは白面うひていさあす
ゆる酒のまつるや〜せといひ〜うせふきり任そ
大の神のはあ〜と感〜をまひ〜く神とあ〜り
まひ〜ふあや〜と〜あ〜〜あ〜あ〜あ
同武年いあ合ぬ〜と廣國大の林海上より〜
や〜せぬ〜〜あ〜人田家や〜よ〜あ〜ふ〜きりきり
通國その〜と〜あ〜〜人〜れあ〜は〜ひ〜く金〜り
社乃君海上肥〜を〜造〜造〜く〜ま〜を〜あ〜も〜後〜は
別〜きり〜造〜造のあ〜ふ〜二條中納言実細〜は〜あ〜

のどた宰相教長入道よつらひ〜

修山のちれき〜と〜あ〜り〜り〜り

り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

は〜の位又位れり形あ職を〜と合身武人ああ
〜、沈論せ〜れあ〜り〜に安元年十月八月あ人あ
補〜〜同武年二月上百参謀あ伊〜あ〜あ〜とあ
三年八月官位候二位よ叙とああ二年十八日あ
あ〜と青の沈漏のね〜もあ〜とあ〜あ〜り〜り〜り
果進せ〜れ〜り〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
よりあ〜り〜り〜同武年正月一日宰守中納言宰相

中ねえしおりのきほりつ高貴あつて正三位を執る所
小倉の兵衛とまゐりしにあれがよき時の人仕立
きほりも御よはすあれは六條のきほりもさうも
じうもさういれははるくはるく同所合ふはる
君を女房作らまはせり

と物なれは後のこれのみや時より
あつてあつてきりあつてあつて君

あの侍又深南の焼給よきりあれしはれ御
及実細中納言のきりあつてあつて女房
越まひはるくあつて

いふれはつひとはれはるかん

うらまはしきハ秋のうらまは

くちふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

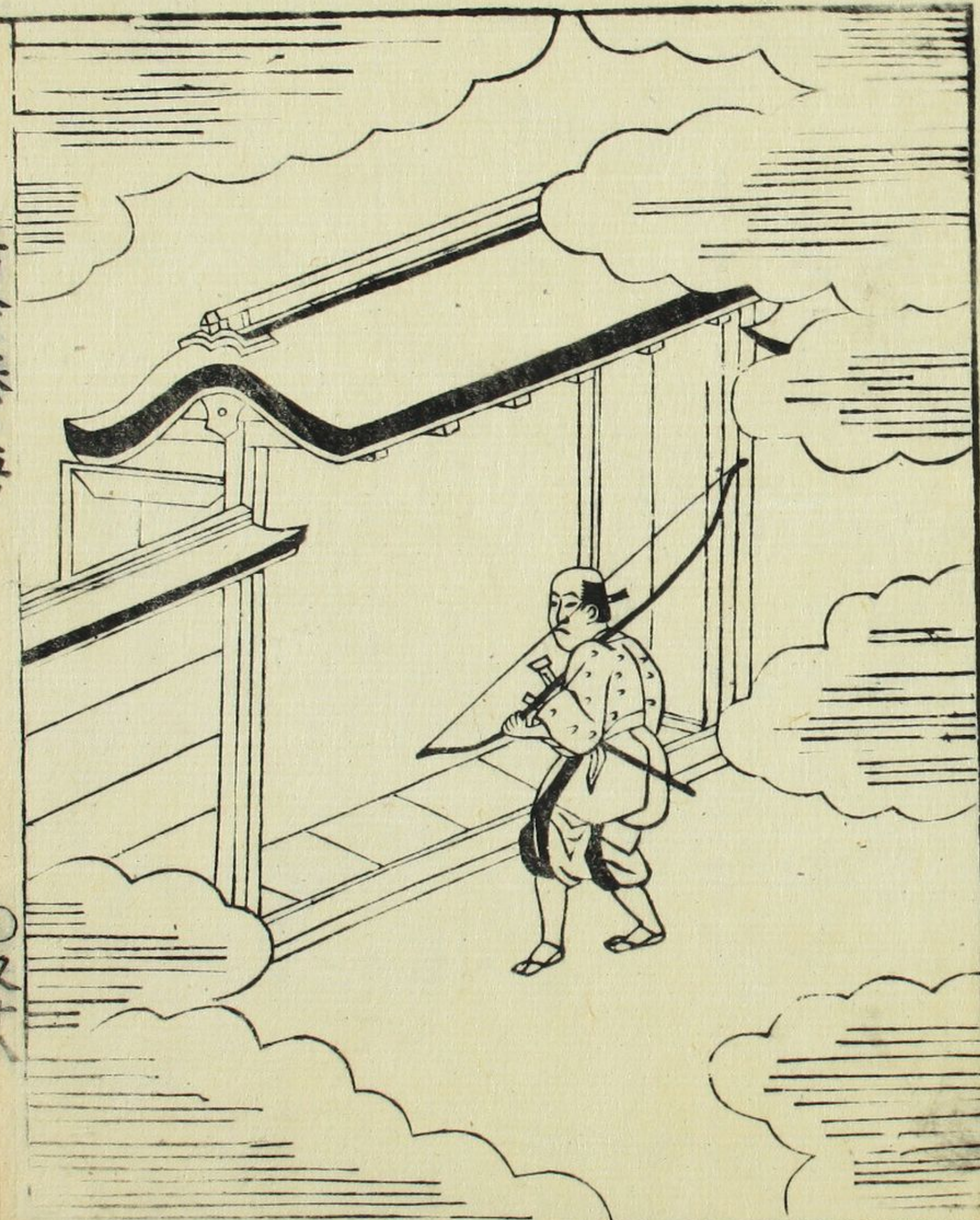
侍通云は春儀の時大抵は年十月の月れ除國小春儀
は入陣敷も実宗補陣の時未中納言もはるくはるく

後次の上臈かりとらふも後通その振ふきつは
宰相右多清中へあつてあつてあつてあつてあつて
御免の事はたつてあつてあつてあつてあつてあつて

て後得^ち水^み平^{ひら}ふさ^のみ^のれ^の務^むさ^のる^るふ^ふま^まて^て非^ひ得^とれ
 二^に得^とり^りし^しか^かり^り今^いハ^ハつ^つる^るま^まお^おう^うら^らい^いら^らう^う物^{もの}
 小^こや^やね^ねう^うら^らい^い又^{また}年^{ねん}じ^じら^らの^のり^りお^おう^うれ^れる^るま^まは^は前^{ぜん}給^{たま}
 の^のら^ら成^{せい}中^{ちゆう}院^{いん}合^{ごう}府^ふの^のり^りと^とり^りし^しか^から^らえ
 八^{はち}年^{ねん}ま^まえ^えし^しの^のあ^あり^りし^しま^まう^うら^らい^い様^{さま}ら^ら
 の^のら^らと^とみ^みも^もね^ねら^らい^いか^かれ^れま^まは^は

き

や^やあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^し
 又^{また}ひ^ひら^らい^いの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^し
 の^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^しの^のあ^あり^りし^し



古今巻



九月小前春候より中納言になつたれはきり字源大納
 言澄^{あきら}由前中納言より大納言ふあききき候^{まじ}とて
 之後打つて^{きん}昇進して左近大尉とてのほり給あき
 是ハ世々今かあがり人^ま才^さ徳^{とく}い^いがかりを候あり
 うられ^うる^らる^るの^のま^まれ^れの^のい^い海^うれ^れら^らあ^あつ^つた^たひ
 多^たび^びに^にち^ちの^の二^に帝^{てい}院^{いん}御^ご成^{なり}が^が成^{なり}候
 う^うと^とに^にれ^れひ^ひし^しれ^れゆ^ゆし^しあ^あり^りの^のい^いり
 り^りの^のい^いの^のせ^せと^とう^うみ^みと^とん^んか^かう
 どう^{どう}の^のあ^あら^らり^りに^にう^うら^らつ^つ候^候あ^あら^らわ
 清^{せい}堂^{どう}岡^{おか}白^{はく}大^{だい}井^い川^{がわ}より^{より}控^かえ^え流^{りゅう}志^し保^ほの^の御^ご成^{なり}の^の御^ご成^{なり}

と傳ふもつゝの御成は御司のたのめもたつ

あはれ川苗代もくろくせいで

天よりゆと神よりハ神

とく免るはんくぐらひくそく神司してヤとつりせ
まへ災早れ天傳くつりわつりて大なるぬゆりて
うれつる猶家もつりてつゝ綴ふつりふきり忽り
夫より汝をりつる事唐の貞観の帝は陛下のめり
き傳故事もたつつりつる結固のつれ家とれぬ
あつりわつりまれ

神とつる屋とそそりキとら一也

秋風をゆく白川の冥

とよあゆとねよ有あつてけおといとんゆんゆ
やとひく人あもつてきん久くつれ居て多と
くゆくゆにわつり形くつてのら唐興あれくつ
ゆれはよよみつりそぞ披あつてきる侍賢の院
の女房ふかおつといふあつて有きり

つねてよりつてつよゆはあ

ころかりゆりかゆいん

とつああ秋年あつてゆつるはあゆいんゆいん
ふつりつらつてあつたつてんゆいんゆいん

けりかたのくさくさたるらん
 ことみくちりきねん母もどろろくくもて物もつは
 て下由さる程よ七条朱権のまあへせ申のまあへ
 まあへ容うろくろりわそのくもあつらひじふもよ
 て車おあへくあへくあ方おへ始終のまへりきり
 大井このおと細文あつまよあ
 和泉或つたこのくあへはあきあはあきあはあ
 へあへあへあへあへあへ
 きのあへくあへあへあへあへあへ
 あへあへあへあへあへあへあへ

ことありきれし社の内おあへるあへあへ
 けくくくあへあへあへあへあへあへ
 あへあへあへあへあへあへあへ
 ことあへあへあへあへあへあへあへ
 同或あへあへあへあへあへあへあへ
 かりく人のあへあへあへあへあへあへ
 くれがらあへあへあへあへあへあへ
 くあへあへあへあへあへあへあへ
 けくあへあへあへあへあへあへあへ
 ことあへあへあへあへあへあへあへ

親りしをたてしむるはあはれぬ
 こころのこころをいひたれはあはれなり
 あはれなりとやわんとおぼゆるあはれなり
 いひたれはあはれなりとていひたれはあはれなり
 あり

江奉国お衆れはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

のあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり
 あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

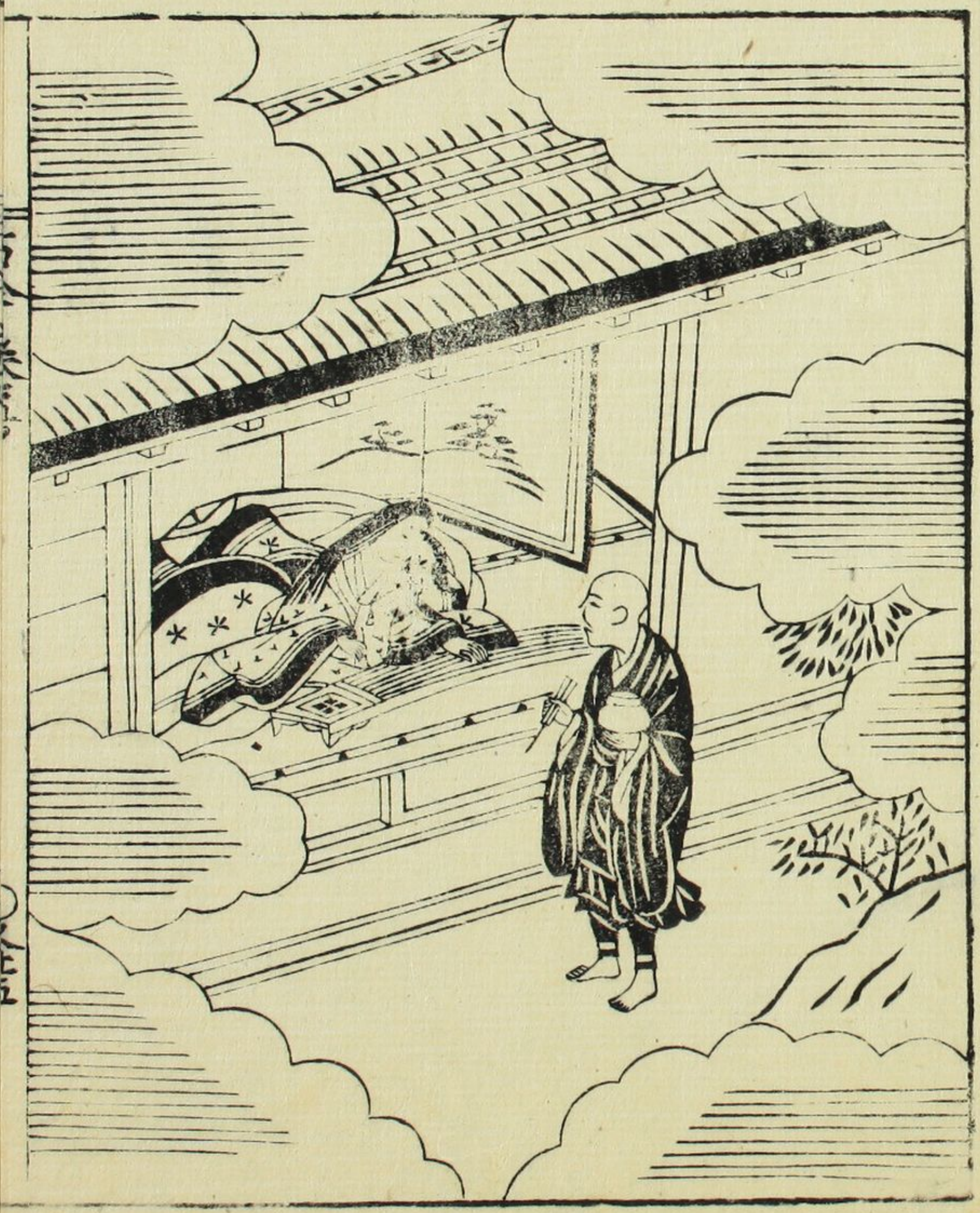
あはれなりとてはあはれなりとてはあはれなりとてはあはれなり

のざりき修羅よ小大を

あひつらやうたふく山がうらうらと

あゝ人形よなりしむらと

ともかく紅の落極一重ふらふら西室あふらり
 き修羅は空の由まよふらあふらうらんとあふら
 此半あふら由祝よらてやあふらあふらまのせえ
 且れハ少燈者進のふ傷の神まへ修羅の目あふら半
 の修羅の由あふらうらてをうらんとあふらあふら
 うらあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら
 るれあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら





亦、馳よる作、世をれを馳集くもつた小大進を
 西志のくとしていそり出あ小知の落極よくたを
 亦、成とておれをよる集るたのむご集もつたぬ
 小名、朋友れ南友れありわのうせころ出衣張の目え
 えれとバ法師、物とるお徳とて侍、賢の酒のけりし
 かりきりりのけりて、師子張まのく集りころを酒
 こそ天祥のあつたあうめてさせ給ころを酒と
 月お友さうとく、ゆれお小大進とため、きれたうた
 もんかう紙おあも、口とらさあよお、あつたあつた
 ば、そとて、厚うて、仁知なるあよあゆりあてきりか

古今卷五ノ

五十五

もふらしては今集の序小のまゝに海へあはれ
ぬらひもやゆらん

元永元年六月十日修理右大臣源季以六条東御院
御所御下たま人丸信汝をとりひきりて元の人丸
此新無房御下あはれくまをそふ給はるゝとのま
り紙をとり石の日に筆紙とめくそ一お旬たり
の人なりそのこよは傍とく

柳下御下人麿晝後一首并

大夫姓柳下名人磨益上世之所人也仕持統文
武之聖朝遇新田高布之皇子吉野山之春風後

仙駕而猷来明石浦之秋旁思扁舟而歴調誠
是六義之秀逸万代之美談者有方今依重出
玄之古篇御傳後亦之新様因有所感乃作後
受其誦

和奇之仙受性于天其又阜尔其餘森然
三十一字調花落鮮四百餘歳来葉風傳
斯道宗近我朝前賢温而無滓鏤之冰堅
鳳毛表京麟角猶專既謂独步誰敢比肩
かのくもわしれ浦の御とるり

ゆらぐれゆく鳥ありそはり

屯明石浦の形勢、下次敷之邪、極其くくく
多緒、先づく不事、愛教多、亦礼人、身よ、今く名
後、會て、細しきり

復目於三、亦乃作大、近水、周詠、冰風

晚来

和齊一首并序 大寺以敷光

我朝、風俗、和奇、為本、生於志、形於言、記一
夏、詠一物、誠為、論之、端也、若君、長之美、是
以、將作、大近、每属、觀天、之餘、閑淡、詞露、於
六、義叶、賞心、若花、鳥草、虫之、逸興、應嘉、招

者、香秋、細馬、之羣、莫今日、會遇、只是一、撥
方、今流、水當、復号、冷風、遼考、來、蓮葉、戰以
凄、之、渚、煙、漸、暗、杖、標、動、以、翫、之、湖、月、初、明
情、感、不、盡、新、而、詠、吟、其、詞、曰、

風、之、け、く、浪、と、也、秋、の、こ、ら、ぬ、ん

ん、こ、ら、ぬ、ん、と、こ、ら、ぬ、ん、は、な、れ

於、樹、下、大、吏、彩、衣、涼、風、吹、来、和、尚

他、理、也、美、秋、季

夕、は、く、よ、ひ、と、ふ、川、と、も、さ、な、れ

志、愛、此、浦、風、す、り、り、り

右三湯を案抄

花ねむもや浪へつる風ゆけよ

まじりて秋のそらにのち

由緒の考案

夕されまは風きくもこれよ

浪きくねも秋やたけらん

右三湯の考案

橋なりとあ風一のほり風ゆく

けたれそ浪きくもこれ

右近中お雅定

夕ゆれあふりけりよ風ゆき

あこれ下流そ浪小あつゆ

涼後頼

夕ゆれあふりけりよ風ゆき

あこれ下流そ浪小あつゆ

中勢控を捕影捕

まふれより秋のそらに川風れ

まふれより秋のそらに川風れ

最後道經

まふれより秋のそらに川風れ

たりやまどくく夕をそゆく

或う浦行威

あはれや浅きうの風の方月

原れ山なり長くそ杉ん

数位形伸

夕されかき月これ川深あそ風の

まじりてあしそ秋をまじりて

少納言字通

若あれあううせのあさうねん

うも原もすすドかりせれ

由原又少進者原るる

わり縁たいのう海あれ夕陰う

影くゆをそ秋そふたを海

昔ま嫁わもあひく怪きり男のうたのうたひ

ては浅くあひうも葉にうかた子浅うくとあはれ

あはれやあそ海男れり浅んくわあひみうそを

男うくとあはれあそまよと尊てうらあううあはれ

あはれうそをうあひり其ううら人のうた道てま

あううそそにううてはうとあまうあううあはれ

とあまうあううううううううううううううう

あらうとふりのかたみきくは盤の男れのおれい
ふりうんと整うく遊あそりさまのうとていふあはれ
きびあうり

きの老おきなはくとうてん人ひとはまのうた

あうりうりうりうりうりうりうり

家内れ松浦佐次郎とていふ大侍おほしやくはまのうた
たうとみうりは役小倉りうりうりうりうり
りうりうりうりうりうりうりうりうり
とていふとていふとていふとていふとていふ
な中な成なわなとていふとていふとていふとていふ

うりうりうりうりうりうりうりうり
松浦の神とていふ今おとていふとていふとていふ
中りうりうりうりうりうりうりうり
まてりうりうりうりうりうりうり

まてりうりうりうりうりうりうり

ひれうりうりうりうりうりうり

昔大納言とていふ人のおとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふ
ふりうりうりうりうりうりうりうり
経うり男おとこのうりうりうりうりうり

かこり成り引てなるれわりしあをわびぬあふき
け後とぞうく

おき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき

わさくの人後ありありのな

さあふ書甘くきけうくさうおくかりふきりや
あましくおくさうりあるをり

小野小町うさうくそ多成好し耐りそ那しき
くさひかりりきり壮表さうまたのめあふさるさ
妃あも漢王固るれあもいぬさびねありとをた
とわさくさうりあるはあまの御満まみのきさひとまひ

食あく海津うみの砂とさのえさうは茶ちや茶ちや茶ちや茶ちや茶ちや
はあわおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
あひさうーおきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
さうさあひさのあまふおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
かこあくおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
人おき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
あまのねさうさあひさのあまふおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
さうさあひさのあまふおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
月さうさあひさのあまふおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき
あひさのあまふおき山おきおき山おきおき山おきおき山おきおき山おき

揚めくろりきほよそえとれて

りぬれそめは浮きれぬとて

さそふもわらうらんそそぬのみ

とてそふみあらがれりかたてめり母

ぞさそひきり人百れを種とれそそ

和泉或る保昌が素めく丹後ふちを信行の素

お合わりきりいゆ或る内信おそふおそきそ

きゆを宮敷れけゆふたふれよゆ或る内信

丹後つらう一海人そ素りあつていひく

のまゆ成らうきらる成水或る内信ゆ

りぞくも成一れ神をひく

おゆりあつておきみられを成きれた

まひゆもあつてあゆれく

とらうけきりあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

よりきねく通房よりきね

あつねのせねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あつねのあつねのあつねのあつね

あれ西院とていらひたりをねて附はせられぬきりるは
ハも實に跡なりり用とありていふもや

花園は名高きよ始とありしつらき縁傳の名高れり
うは小徳のあよむと書つりきりやと秋のくどきよ
南庭よ如くともさるれなくと書してあり海はる
に書られし下格子よ人まのれと作らせきりる人
五位ぬくひて人もらぬとすてい伝書つりてこ
らひはむらせと作らせられぬきりるにはひあは
あしよとられバカとゆりては格子ありてはては
びととさるれババさくや一音つらうゆつとと作られ

むむあてあどののともど巻の匂紙中出と書とさう
いさうや扇を折らわらぬと書ひつらぎやと書ひし
うらをねむゆをばとてばてまふ扇うあはと作れ
てさつらうゆつととありせられ

わとあさこれみとりれ多成りりあさ

夏つと秋冬ともさうと書く

こよふとらをねむゆと威一始と書つらり
ひつと書折ゆとて始りせきり
寛平お合にり川原成友則

書つらりかさみといわかりりる

今そなりくおの秋芳のよき

こゝ先はた方ゆくまざる身又文字を添へたりを何討
有方の人へ志くふまゝひきりえし次句お露くは
やのひき海よこそまことさをたけりりふされれば
まゝ〜

お任はあゆ〜三月書の新入〜おの冬〜書ぬ
ふと成行むむのあ〜みぎりふ書終

ふ〜のあ〜はる〜れ〜の〜

あ〜の〜の〜

大酒を〜ら〜て〜と〜の〜と〜を〜月〜の〜の〜

〜を〜と〜の〜書終

〜は〜り〜〜を〜れ〜は〜〜り〜ぬ〜病〜の〜書終

三月書よ〜を〜亦〜や〜何〜と〜作〜れ〜お〜

〜中〜し〜那〜お〜病〜ぬ〜〜ぬ〜い〜ぬ〜も〜り〜

〜れ〜ゆ〜〜じ〜り〜の〜ぬ〜ぬ〜〜ゆ〜〜ゆ〜

〜は〜目〜う〜せ〜ま〜り〜大〜酒〜を〜お〜の〜お〜げ〜れ〜る〜

〜は〜り〜ぬ〜難〜せ〜〜と〜り〜る〜ぬ〜も

別書惟方〜の〜二〜書終の〜の〜の〜と〜ぬ〜せ〜ぬ〜ぬ〜

〜心〜が〜何〜を〜握〜筆〜を〜ぬ〜ま〜り〜て〜後〜白〜河〜院〜の〜

〜は〜ゆ〜り〜や〜り〜々〜れ〜が〜ぬ〜ぬ〜〜と〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜

とて同くわがれ一人のゆゑにわがれもあ
げられうびぐさたう一ぼつとあめく

あの際もあつていけの海川

わがれうもぬく神の神

とらみくあつてわがれをいかに法を傳へて
てはらわうりせんうも飛あうきあき
ふはあふうりて百人とれあうや

後多羽渡は時定家はあまてかりきり
ぢりるあつてわがれあうりてあうり
があうりうあつてあうりてあうり

又後成はゆるけりけりてうりてあうり
うりて

わがれあうりてあうりてあうり

うりてあうりてあうり

殿事いふあつてあうりてあうり
あうりてあうりてあうり

あうりてあうりてあうり

あうりてあうりてあうり

あうりてあうりてあうり
あうりてあうりてあうり

多時七そのお成ふみくそ廻まわ向せききるつひ終つひ
今ふく甚え志しむあかざりきりうの七とれ肉よ

契せきはれんあゆみの里より座ざよりき

流りゅうのりいひとれくもきけうれ

宗家そうけ大納だいなをとしてし神かみ承じやう備びるぶふうふひて座ざううく

神かみさびさうう人ひとおりりささお方かたハ後ご白河しろがわ法はふをを乃の女房にようばう

右みぎ場ばのの佐さとと申まをるる宗そう持ぢれれ仲なおおとと着ちやくををどどとと後ごれ

くくりりなりなりとと成なげげるる孫まごをを座ざうう

あかとのいふのられぬえりき

あひあひかかももああききをを座ざうう

ここままくくややききををりりををれれがが座ざるるののりりとと車くるま成なり
つつりりくくひひんんささりりとと又またししおおちちりりをを座ざうう
ささーさくくとと也なり

座ざ大だい守しゆ右みぎ方かた長ながううらら海うみををせせててハハひひ出いくくここりりをを座ざ
女によう房ばうれれももとと人ひと作しやくおおれれくく成なげげくくままりりををりり茶ちや袋ぶくろの
指さしととももるるををううととああううれれををんんととややりりてていいふふ法はふ書しょ
ててああひひううけけねねととああふふううくくししりりおおききくくりりををりり

こひつらなれん君りきこをれよ

あんなねうその指なりき

女房にようばうのの指さしゆゆははああじじととささくくしてしていいふふ法はふ書しょいいふふ

おねのたま

わあふーまふいれ池のひめね

これゆへちりたもしりるん

とつりきる時おきりて産むりきり申後傍の産
 ぬいふゆがふれをまぐくのみどやあひかへて目入
 及右所より新面を結るつわくたひり成りり出
 ぬくやきくをてそむりゆりくまをれ入るぬ
 ちんおちんを結りしは結ひと産成それらうらなを
 うそおねらうそとく家元何園おつ返信ゆり
 みしあそそ神をねれうそとくあそふおね志満

おそねねをれそとくゆりやあそふ産むり
 産むるゆへちりきりたもしりるん
 此おひの結を産むるぬいれ結むるけんをらぬ
 おりりりおねらふん結を産むるぬいれ結むるけんをらぬ
 申しゆへちりきりたもしりるん今れ志満田をらぬ
 似ゆへちりきりたもしりるん

志満田をらぬ結を産むるぬいれ結むるけんをらぬ
 似ゆへちりきりたもしりるん
 志満田をらぬ結を産むるぬいれ結むるけんをらぬ
 似ゆへちりきりたもしりるん

此亦めしとせく武闘ハ初めふきくもはりしもの
くも女まへはけあふしん一はらぬもくもあはれ
ていし一作らふも程くもよみまほ

ゆらみりらひわると海うわをたふ

うらみちねとまのりりきん

みうしわめあはれひはくはうらむもはりせきり共
かうまア高上人司のくもあはれくうけらぬま
らる年ふはくわありき海もあ

河内重和とハ山治高判者人しりまらもまの
りのかりき海が秋よりきまも女房とたのひけ

教書成てぐうくわくりせんきり

人海へいらりもやまらやあのお海ふ

まれづうひまゆりれきん海もあ

女めぞくまづいさうい人何海うりあぞくは海に
ふれくあはれわくまららぬいもあはれあてま
るまらあわらうとまもあはれみせんきり

あゆみあはれくもあはれうらわしき

人海へあはれらうひたうあれ

和泉或戸悪て摘荷へまきるふ田中め林の程
て時あはれまけらぬいさくもあはれくもあはれ

杯^七 或^九 大^十 捕^{十一} 永^{十二} 乾^{十三} 一^{十四} 有^{十五} 系^{十六} 指^{十七} 至^{十八} 於^{十九} 政^{二十} 治^{二十一} 治^{二十二} 治^{二十三} 治^{二十四} 治^{二十五} 治^{二十六} 治^{二十七} 治^{二十八} 治^{二十九} 治^{三十} 治^{三十一} 治^{三十二} 治^{三十三} 治^{三十四} 治^{三十五} 治^{三十六} 治^{三十七} 治^{三十八} 治^{三十九} 治^{四十} 治^{四十一} 治^{四十二} 治^{四十三} 治^{四十四} 治^{四十五} 治^{四十六} 治^{四十七} 治^{四十八} 治^{四十九} 治^{五十} 治^{五十一} 治^{五十二} 治^{五十三} 治^{五十四} 治^{五十五} 治^{五十六} 治^{五十七} 治^{五十八} 治^{五十九} 治^{六十} 治^{六十一} 治^{六十二} 治^{六十三} 治^{六十四} 治^{六十五} 治^{六十六} 治^{六十七} 治^{六十八} 治^{六十九} 治^{七十} 治^{七十一} 治^{七十二} 治^{七十三} 治^{七十四} 治^{七十五} 治^{七十六} 治^{七十七} 治^{七十八} 治^{七十九} 治^{八十} 治^{八十一} 治^{八十二} 治^{八十三} 治^{八十四} 治^{八十五} 治^{八十六} 治^{八十七} 治^{八十八} 治^{八十九} 治^{九十} 治^{九十一} 治^{九十二} 治^{九十三} 治^{九十四} 治^{九十五} 治^{九十六} 治^{九十七} 治^{九十八} 治^{九十九} 治^{一百}

以^一 息^二 中^三 勢^四 指^五 痛^六 維^七 維^八 維^九 維^十 維^{十一} 維^{十二} 維^{十三} 維^{十四} 維^{十五} 維^{十六} 維^{十七} 維^{十八} 維^{十九} 維^{二十} 維^{二十一} 維^{二十二} 維^{二十三} 維^{二十四} 維^{二十五} 維^{二十六} 維^{二十七} 維^{二十八} 維^{二十九} 維^{三十} 維^{三十一} 維^{三十二} 維^{三十三} 維^{三十四} 維^{三十五} 維^{三十六} 維^{三十七} 維^{三十八} 維^{三十九} 維^{四十} 維^{四十一} 維^{四十二} 維^{四十三} 維^{四十四} 維^{四十五} 維^{四十六} 維^{四十七} 維^{四十八} 維^{四十九} 維^{五十} 維^{五十一} 維^{五十二} 維^{五十三} 維^{五十四} 維^{五十五} 維^{五十六} 維^{五十七} 維^{五十八} 維^{五十九} 維^{六十} 維^{六十一} 維^{六十二} 維^{六十三} 維^{六十四} 維^{六十五} 維^{六十六} 維^{六十七} 維^{六十八} 維^{六十九} 維^{七十} 維^{七十一} 維^{七十二} 維^{七十三} 維^{七十四} 維^{七十五} 維^{七十六} 維^{七十七} 維^{七十八} 維^{七十九} 維^{八十} 維^{八十一} 維^{八十二} 維^{八十三} 維^{八十四} 維^{八十五} 維^{八十六} 維^{八十七} 維^{八十八} 維^{八十九} 維^{九十} 維^{九十一} 維^{九十二} 維^{九十三} 維^{九十四} 維^{九十五} 維^{九十六} 維^{九十七} 維^{九十八} 維^{九十九} 維^{一百}

古今事考

四六

又通云

老ねとくやうろ徳力とせあふん

はひとんきありわんゆりり

又通のうと又教教く多証書とけやう教教

とててもやむたえのうと下り徳徳の

又通のうと
わくともあまむひよき徳く部

わくともあまむひよき徳く部

又通のうと
年徳ぬ教教と老やう徳と

又通のうと

老うくれあんやうとせは門と

あやうととあはらと

いれをと人あひらり徳とせり徳ふと徳と
と徳とせり徳徳成徳の常徳徳徳改部也

席者徳徳部也

うと徳ハのられとと徳と徳と

又と徳と徳と徳と徳と

教徳徳源教教

徳と徳ととと徳と徳と徳と

徳と徳ととと徳と徳と徳と

古今卷
三十一
と考ふに源氏五

年次記し其のきりふくむるなり

口より多き志しぬにふかきそり

前石列別駕統部成伴

ありてらふし門あり海へ入るなり

ありぬはきし人さたやまのじん

李朝信命永范

いふにしぬひしそきあはれま

いふにたり家よりいふあり

三為三代之信讀與七旬之類
世具三區今別七叟故有此句矣

右系指を更源朝政

いそらありてありて其のきり

ありてありてありてあり

散位大に維光

年ありてありてありてあり

人ありてありてありてあり

坂下 産小はく人へ守るに事終部下盛方伴綱

政平憲盛完成尹范朝照ありてありてあり

小位へい月たり信以陸信よりりありてあり

の目よりありてあり

形事の近習ありてをききれ大由の...
多沢わねづらふとてつめ小写...
中納言長実の二男春藤...
三男長実を更...
中ハ中納言長実...
小きり君之が自業...
焼小きり...
おしり...
おくつ...
名件...
おくつ...
名件...

より今ハ院小め...
ゆゆ...
多と...
小き...
おく...
後...
佛...
せ...
書...
きり七...

さくられぬ身こそはしきれのしらべ
あつらふこれしるはちのくさ
日向の雲霞ゆくゆきる時ありお命のちきり
ね政お長きまのあま

あつらふ春ふはしるはちのくさ
まののひかりのまのま
さまのちきりあまのまのま
節のりまのちきり
まのちきりあまのまのま
人あつらふまのまのま

おお階房のまのまのま
くまのまのまのまのま
りまのまのまのま

あつらふまのまのま
あつらふまのまのま

あつらふまのまのま

あつらふまのまのま
あつらふまのまのま
あつらふまのまのま

又於盛衰出入物事のりもつらかりゆき
 とありとる邊の風もまほしうと
 流ぬらりの浦きらめそ
 五

たうらこのさみれつらおつあふ

うそのつてあもせりれうーやそ

仁和寺仁和寺法華成徳法華 けうて神也 龍徳龍徳の福舎福舎

の流より年巡礼巡礼きらめや山吹衣山吹衣つらゆき

式人おあぐとぐと花んくゆきらひいけき

のみくえんふえきねこくふのて方後方後けい

山吹の花文衣みくーら

おのの秘事のこころ

とけうくわいひけくめき心種心種はくく

わんどくけいせーゆき

山吹のなれ文衣わあつわれん

わそめうらうらとせんとせん

春位上人春位上人青よりけけくもくもくゆきあをわ

あて二十字ぬふけがひくいとすの懼いとすのあ合とくまづけ

りあくれまねとつとて道徳道徳わあうけはあせ

後成後成は小判の詞をわせきり又一巻ハ文海文海あ合

古今卷八

八十二

もく枝の香うらけのささやみ

久一後成

若葉のささやみもまを川に事ある

志川をささけよ枝のりや葉に

又二首をそとくゆき海同

契とまうらさうれとりきんぢん

わがれうらけのほりれをーや火

あのみられさうりぢぢを枝のよみ

くらとひをさま川さうひみよ

久一上人

わがれうらけのほりれをーや火

くらとひをさま川さうひみよ

あのみられさうりぢぢを枝のよみ

契とまうらさうれとりきんぢん

解^リ脱と人けりや不伝流といふ傍ありきういぢ

一とあせりのあてめんぢぢれとと人ぢぢふう

てわかれさうれれもあひあうりやさうらあのかい

ふあひうらけのささやみ

ねもゆーや伝流うみきんぢぢ

そのさうさうりぢぢを枝のよみ

け倍しき候とてありし面はきゆる所少く形く
うせにたりとていふもあらざるありきなりとて

名和定元は割箇中てのさ片五智光度小のなるを家
付種念前右大ねませしきなりきり三浦十郎
義連つとむら梶原つとむら宗時むねときのたふ八侍きり山縣やまがた南なんの後退ごたい出
の所ところ起弱おこじやくの危あやき入いりてまう者大ね小向くゆとま
うりまを成なりてぬれ出いてらお泉いづみをり相傳あひたづれお
のり成人おとな小行こぎしとれぬゆとゆととともなれなり解
弱じやくくあうりて半ゆぶと適あて君也とぬとハヤ入作
りんとはとたハ行いぐ人もゆりのハきとあり足系

ふへんそそありてゆとてその文も成推おしたりとれハ
大ねおほぶびりりとていふもいり文章のてくて定相
傳たづねりり少くもさそとれぬきいそり傳たづね
中とゆとさゆゆと人ふ文よゆれをゆとせやとれ
義連つとむら小祝こむかひとていふと作つくりてあゆと未
うりとれをし書かけりりまうりて名義なぎ深ふかくうらあゆとり
おゆい多傳たつた扇あふり一首のあてやゆいなり

い川がをゆとれこのあゆわまはたハ
ゆらの古系ふるけいりりきとらとて一
かく書く義連つとむらふふれり判はらとくく尼にふとせと

るげつろりしりきねん新連判らるるにふまび
てざり年号月日ゆき及日有夫お委自筆に書
下されば細うやとふとこのごころの尾形
きりくくは後右大臣の時伴に尼が女むすめの前
又次指くゆはふとくゆりきるに年号月日ゆき
もゆいひきれりその自筆そのこれに
て安路あんじふざり件扇あふ松まつ骨ほねくろりいありてふ
細骨ほねあくりんゆきる由よしくみふとて
くろりゆーかり

同之おとるしあく樹きしれたふららこのまう

みかりしゆ成みくまにゆき高野山にゆき
きふゆあんしきる

もゆはれらららららららららららら

大おとるしあつた

ひざらうがはれーからん

わゆあまゆがりやまゆ成らりてありきるは
うらりららりきねんゆきるゆきるゆきる
みぞれしひきるゆきるゆきる

わゆあまゆがりやまゆ成らりてありきるは

みぞれしひきるゆきるゆきる

由つらそのうらみめれの大畑のりもこころせぬ
 海しきる比とて先とて百とてはよぬせありゆゆりきり
 と大畑を感懐のわぬりに寄くふまは二ふれりもく
 見えにたつりしきりきり二おは百とてはよぬ
 ろりはとてみそとてはよぬまふおすむとてはよぬ
 あられきりゆり久しきとてはよぬのびいといふゆり
 わりぬお不無休なるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 とせはゆりぬとてはよぬゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 じげよおとてはよぬゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 由製とてはよぬゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

せられつゆゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 されまじとてはよぬゆりゆりゆりゆりゆりゆり

松後信公行意赤痢病成大事ありて存命治わが
 ありきりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 きあり鬼邪せき傷心とやや叫やをれはおはゆり
 ぬがし見しきりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 けゆり

去月れをゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

川あも流くもあつる月り邪

詠之の夢さへり目せつらん肝よそふくまはしき
 程ふまとのぬも後病忽やそく例のどくふらんよ
 ちりひあ建保年九月十二日内裏の百そくは
 小河の月城あはれつう海山せる也及字のあらは
 ち細更志給ふよそく不忠伏の半へ
 院の院中六の四時六半の歌成りて人へ
 ありある成くせ履れり定ぬるあはれ心をも
 名へせ給よ古あり

三のほきちりみえりどふれより
 ちのいりりいりいりいりいり

げう成女人甲へ書く事とせり甲への
 由ふふ真のまにまにありきりとき
 後名相院の時まに指以孝道が長小出聖聖と
 らせられきたるせりありあきる時なりてまに
 皮が下ふあつけりせりきると程とくめり
 をは聖聖ふけりきりありきり

らり成りてまにまにまにまにまに
 老のあまこれのあひけるう程

明徳院の位の所あるの字命まをり作若れ名成
 かへりて成候判めくゆるるに古寺のうらま

物りうゝ家のしらす君はなつらぬを

の御みことのり成みましや

寛治元年二月廿七日為園をこれ様御あり奉るに

御書ありて血辨されたりおこしめこれ御

る御成書しきま御しらす代書され御書成り

せしやと

はしらす御の代これ治りて

あつらひし御をみらあつらん

四五

あつらひし御をみらあつらん

わあつらひの治りて

けり芳天曆の御しらす御ありて

時貞信これ御の御しらす御ありて

おろり物よ御書平まられ御書

あつらひし御をみらあつらん

御の御代りあつらん

四五

あつらひし御をみらあつらん

あつらひし御をみらあつらん

あつらひの御書よあつらん

御ごのふりまをかりしやして御ごに御ご理りをくも命いのちに
大おほく御ごの影かげを造つくふなりしやをれし者ものなりしやを
くこれ御ごの影かげを造つくふなりしやをれし者ものなりしやを
くこれ御ごの影かげを造つくふなりしやをれし者ものなりしやを

つとねすまのふんをわれとも

成なり源げん傍はた心こころのまを御ごの影かげを造つくふなりしやを
れし者ものなりしやをれし者ものなりしやをれし者ものなりしやを
あやしれりのまを御ごの影かげを造つくふなりしやを
の影かげを造つくふなりしやをれし者ものなりしやを

ととてゆきりばうらぬ女め房ぼうは人ひとの心こころをゆきり
がは法はふ脚きゃくをみくわれし人ひとの心こころをゆきり
なんどわぶきりつとくま房ぼうは花はなを枝えだわけてしひん
中ちゆうのつりまねきよの法はふ脚きゃくをみくわれし人ひとの心こころを

ゆきのまねきよの法はふ脚きゃくをみくわれし人ひとの心こころを

とひひけしをれしひつる女め房ぼうは人ひとの心こころをゆきり
ととてゆきりばうらぬ女め房ぼうは人ひとの心こころをゆきり
入い道だう者もの大おほく御ごの影かげを造つくふなりしやを
れし者ものなりしやをれし者ものなりしやを

物あれきそむくあはわのれ捨とそく
身成りてそんぬるあうりそ

四七

よのうれきひそはひのりあうり

物あそんぬるあうりそ

けいそくは法なりて恐るひくはるも教ふて小童のま
あくおの雅定お付てや入信くはるは次はあは
て知ふより言身平は法時素性法師のあつたあは
さうり入道うりくや信きるとや

古今著聞集卷之五終



